

「レコード芸術 2011年 7月号“CRITICS' REPORT」より

執筆者:ペーター・コッセ

翻訳:広瀬大介

メディアで数多

く取り上げられる内田光子さんの陰に隠れがちではありますが、1987年にリーズ国際コンクールに入賞して以降、着実なキャリアを積み重ねてきた小川さん

は、まぎれもなく印象的かつ独創的なピアノリストです。先日、小川さんの5枚目となるドビュッシーのCDが手元に届きました。録音は2000年とのこと。私はこれまで、これほどまでに美しい夜の浄化を表す和声の連なりと、慎み深い旋律による《月の光》を聴いたことがありません。それまでは洗練され、やや苦み走った演奏の多い終曲《パスピエ》ですが（グルダ、リヒテルなど）、小川さんが楽譜に注ぐまなざしは、常に適切なものです。なにしろ、この古い様式で書かれた舞曲には「アレグロ・マ・ノン・トロppo」と指示されているのですから。

しなやかに、かろやかに、小川さんの思いに満ちた両手が《2つのアラベスク》を描き、より小規模な作品（夢想、ロマンティックなワルツ）では、ニュアンスをより柔らかに、歌うように、ささやくように伝えます。ドビュッシーの作品は絵画的な思考の産物ではあるのですが、同時に心のありようをつたえる切実な音楽でもあります。このことを、日本人たる小川さんの演奏を通じて経験できるのです。音楽の世界の国境はいまなお融通の利くものだ、という希望をもたせてくれます。

【BIS 1405】。